

# 新しい左京区基本計画づくり



ニュースレター 第12号

発行日 平成22年11月30日  
発行者 左京区役所区民部総務課  
Tel 771-4235

左京区基本計画（第2期）を考えるシンポジウム を開催しました  
平成22年11月16日（火）午後2時～4時15分・国際交流会館 イベントホール

## 第1部 基調講演

### 三国岳から南禅寺までー地球科学で見る左京区

講師 尾池 和夫 氏（財団法人 国際高等研究所所長、前京都大学総長）

#### 【講演の概要】

- 最近日本全体で気温が上昇する傾向にあり、真冬も減っている。1時間に80ミリを超える雨が降ることもあり、今後は、こうした状況を踏まえて防災を考える必要がある。
- 左京区を南北に走る花折断層では、2千年に1回程度地震が発生している。一方、活断層運動のおかげで美しい景観が生まれ、雨に削られた土砂がたい積して扇状地や地下水をもたらし、これが文化、産業を生みだしたと考えられる。
- 過去の地震データを分析すると、概ね百年ごとにプレート境界型の大地震が発生しており、統計学的には、西暦2030～40年ごろに次の南海地震が起こればと考えられる。その前50年くらいが内陸地震の活動期であり、現在はその活動期に入っている。
- これから先の左京区について考える際には、断層による地震を想定することも重要である。



## 第2部 パネルディスカッション

### 自然を愛で、歴史を学び、文化を楽しむ『豊かなこころ』

コーディネーター 宗田 好史 氏（京都府立大学生命環境学部准教授）

パネリスト 深町 加津枝 氏（京都大学大学院地球環境学堂准教授）

笹岡 隆甫 氏（未生流笹岡次期家元）

長谷川 綉二 氏（ボーイスカウト北星地区協議会会長）

#### 【パネルディスカッションの概要】

- 左京区にはたくさんの魅力があるが、特に印象的なのは北部地域の山、川、茅葺<sup>かやぶき</sup>の家など昔からの里山の美しい風景である。そして、そこに住んでいる方々がこの風景を守り続けてきたことは本当に素晴らしいことである。
- 左京区の良いところは、自然が近くにあることだと思う。生け花の世界でも昔は山に入って自分で生け花の素材を探してきていた。今はなかなか山に入ることが難しくなっているが、街中での生活と山の自然とが接する機会をもっと増やしていきたい。
- 新しい左京区基本計画では、豊かな自然を生かし、北部地域と中南部地域の交流を大きなテーマとしているが、最近交流することが難しくなっている。



【裏面へ続く】

- これからの時代は、団塊の世代の方が文化の担い手として交流の中心になってもらう必要がある。仕事などの経験を通じた深みも伝えられる担い手として、こうした方々に、お茶や生け花を習ってもらえるような取組を進めていきたい。
- 大文字送り火は信仰から始まった行事であり、自分の存在、先祖、そして今の幸せに感謝する気持ちを忘れないでほしい。また、送り火には1年がかりで山を手入れする様々な作業が必要である。この伝統を、うまく次の世代へと引き継いでいきたい。
- 交流を深めるためには、気軽に話ができるような人と人の関わりが必要である。組織を設けることも必要だが、義務としてではなく、互いに関心を持っていることについて、楽しみながらやるのが役に立つというサイクルを作っていくことも大事だと思う。
- 京都市未来まちづくり100人委員会を母体に設立された山紫水明の京都チームは、祇園祭で使われるチマキザサの再生に取り組んでいる。この様に、ちょっとした提案をもとに、山の自然とまちの人々をつなげるための活動を展開していくことが重要である。

## 第7回 次代の左京まちづくり会議 を開催しました

平成22年10月22日（金）午後2時～4時 ・左京区役所

### 【意見交換の概要】

- 北部地域だけではなく中部や南部地域でもサルによる被害がおきている。人とまちとのかかわり方が変わりつつある中で、「自然を愛でる」だけでよいのかといった意見もあるが、このような時期だからこそ、自然とのかかわりを大きく考え直す必要があると思われる。
- ナラ枯れを防ぐためには、山を積極的に活用し手入れをすることが重要である。かつては里山として、人が山にかかわっていたため、このような被害はあまりなかった。
- 京都市では区民誇りの木事業を実施し、地域でなじみのある小学校や寺社等の木を区民に選定していただいた。左京区は緑が豊かで、市全体の中でも多くの誇りの木がある。
- 最近では働く女性が増加しており、保育所の待機児童の解消が求められている。前回の会議で視察した花背小中学校には、保育所として京ベビーハウス堰源が併設されており、非常に素晴らしい施設であるとともに、先進的な取組を進めていることが感じられた。
- 計画案に「ほんものといふ観光」という記述があるが、何を「ほんもの」として位置づけるかが非常に難しいと思う。表現を見直した方がいいのではないか。
- 左京区内には、文化財に指定されていないような歴史はなくても、市民が普段の暮らしの中で利用しているもので地域の文化資源といえるものがあると思う。疎水分線や中央分離帯の並木などを地域の文化資源として位置付けることによって、市民が主体的に守っていくことにつながられるのではないかと。



- 最近では左京区でもマンションの住民が増えており、自治会に参加しない住民も多く、地域全体に情報が伝わりにくくなっている。計画案でも市民参加の項で「地域活動への参加を呼びかけましょう」という記述があり、今後更に検討すべき課題だと思う。